古英語『謎詩』(一)

藤原保明訳

まえがき

古英語の写本の一つである「エクセタ写本」(Exeter Book) にはなぞなぞをテーマにした詩が 95 編収録されている。これらの詩は謎詩 (Riddles) と呼ばれ、ゲルマン古詩の伝統である頭韻の原則に従って書かれていて、英雄詩や宗教詩などと同様、一つのジャンルを形成している。

これらの謎詩は写本の中では 3 つのグループに分けて収録されていて、最初のグループは 1 ～ 59 まで、次のグループは 30B と 60、3 番目は 61 ～ 95 である。なお、3 つ目のグループは写本の終わりの部分にあって痛みが激しく、不明な箇所が少なくない。一方、20 と 40 は写本数葉が欠落しているものと考えられている。謎詩はかつてはキネウルフ (Cynewulf) という詩人の単独の作とみなされることもあったが、詩全体の統一性・均一性の欠如という観点から、最近は複数の作者説が有力であり、キネウルフの詩は一部に限られるとみなされている。

謎詩の典拠についても諸説がある。8 世紀の英国ではラテン語の謎詩がはやっていて、学者の間で回し読みされていたようである。このことから、古英語の謎詩はある程度ラテン語の謎詩の影響をうけているものと思われる。当時のラテン語の謎詩の作者としては Symphosius, Aldhelm, Tatwine, Eusebius らが知られている。5 世紀後半か 6 世紀前半頃の Symphosius は Lactantius と同一人物とされ、100 編のラテン語詩を作成している。Aldhelm (640?-709) は Sherborne の司教で、謎詩を Symphosius に負っていることをみずから認めた文書を残している。Tatwine (734 没) はカンタベリの大司教で、40 編のラテン語の謎詩の作者である。Eusebius は、716 年に Wearmouth の大修道院長となり、Bede の友人だったと思われる Hwatberht (680 頃-747 頃) と同一人物とされていて、60 編の謎詩を残している。これらの作者のうち、とりわけ Symphosius と Aldhelm については、彼らの作品の影響はあちこちに認められ、たとえば、Tupper (1910: xli-xlii) によると、35 と 40 は Aldhelm の lorica「甲

胄」と creatura「被造物」の謎詩の焼き直し、47 と 60 は Symphosius の tinea「シミ（紙魚）」と harundo「葦笛」に負っていて、84 は Aldhelm の謎詩 aqua「水」の異形である。しかし、たいていの場合、「エクセタ写本」の謎詩とラテン語の謎詩の類似は後者の真似に基づくものか、それとも同一の伝統的な題材によるものか、明確にすることはむずかしいと言われている。

「エクセタ写本」の謎詩の統一性の欠如、作者が不明であること、および現在の形にまとめられた状況が明らかでないことから、古英語の謎詩の成立時期を特定するのは不可能である。ちなみに、Sievers は言語上の証拠から 8 世紀の前半とみなしているが、この時期に該当する詩はわずかであり、詩全体が集成された時期についての証拠は乏しい。多くの謎詩は英国人が最も活発にラテン語の謎詩の作成に情熱を注いでいた 8 世紀初頭にさかのぼる可能性は強いものの、これについても確証は得られていない（Krapp & Dobbie: 1936: lxv-lxvii）。もっとも、謎詩を含む「エクセタ写本」そのものが現在の形に整えられた時期は 965-75 年頃であるとみなす点では学者の説は一致している（Muir : 1944: 1）。

古英語の謎詩では文字謎（acrostic）などの技法は用いられていない。ただし、4 編（19、24、64、75）については、古英語のルーン文字が活用されている。一方、36 では homo「男」、mulier「女」、equus「馬」というラテン語の子音の部分だけが記されていて、母音を補えば謎の答えとなるという方法が用いられている。

個々の謎詩のテーマについては不明なものが少なくないが、全体としてみると、日常生活で見聞きすることの多い動植物、道具、飲食物、気象、出来事がほとんどである。

謎詩は難解な古英詩の中でもとりわけむずかしいことから、平易な邦訳は文学や語学での研究に利するところが大きいと信じ、日本語への訳出を試みた。本稿で訳したのは全体の 3 分の 1 強に相当する 1 ～ 38 である。底本としては Muir（1994）を用いたが、Wyatt（1911）、Krapp & Dobbie（1936）も適宜参照した。その他、巻末の参考文献に記した先学の業績に負うところも多い。ここに記して感謝申し上げる。

古英語『謎詩』（一）

1

きわめて狂暴な私は力強く立ち上がり、激しくわめき、たまに狂ったように

陸の上を動き回り、人々の家を焼き、住まいを略奪する。そのような時に何が私を旅へ駆り立てるのか言い当てられるほど賢く分別がある人間がいるであろうか。私が水に包まれ、強い力によって遠い放浪の旅へと追いやられ、森や花盛りの木立を荒らし、木々をなぎ倒す時、灰色の煙が屋根の上に立ち昇り、地上では大騒動が、人々の非業の死が訪れる。これまで人々を、すなわち、陸の上に住む者たちの身も心も包んでいたものを、私は海の中ですべて背負う。私を包んでいるもの、またはそのような荷物を運ぶ私は何と呼ばれているか言いなさい。(1-15)[1]

2

人間は望まないかも知れないが、私は時々潮騒の下の地面を、すなわち、海の底を訪ねる。私が大海原に包まれて荒々しく地面を、広い海底を掻き乱す時、海は荒れ、(...)[2] 波はうねる。鯨の海は響き、大きな音を立てる。潮流は岸を打ち、石と砂、海藻と波を険しい崖の上に激しく投げ上げる。それぞれの旅において私の支配者であられるお方が許してくださるまで、私は水の囲いから逃れられない。賢明な人よ、かつて私を覆っていた激しい流れが再び静かになり、波が穏やかになる時、だれが私を海の把握から引き離すのか言いなさい。(1-15)[3]

3

主人は時々私をしっかりと閉じ込め、その後、大きな私を肥沃な平原の懐へと送り込み、そこで無理やり留まらせ、力強い私を暗闇の中の狭い場所に強引に拘束する。そこでは大地が私の背にきつくのしかかる。その苦しみから逃れる術はなく、私は先祖代々の人間の住まいをゆさぶるだけである。すると、破風のある広間、人々の住まいは揺れ、家に住む者たちの頭上の高い壁は震える。私に進むべき道を示してくださったお方は私がその支配から逃げられないよう

---

[1] 1～3を1つの詩とみなす説もある (Krapp & Dobbie, 1936: 321)。答えは「陸上の嵐」(Storm on land)。

[2] 4行目の右半行欠落。

[3] 答えは「海底の地震」(Submarine earthquake)。

に、万物創成の時に最初に私に束縛を、すなわち、鎖と足枷を課された。そのお方の指示に従って私が狭い場所から飛び出すまでは、地上の空気は静かで、海も静かに見える。(1-16)

私は時々上の方から波を騒がせ、潮流を乱し、火打ち石に似た灰色の潮の流れを岸へと追い立てねばならない。泡立つ波は崖に打ちつけ、山のような波は深い海の上に黒々とそびえる。その後に別の黒い波が大洋に乱されて押し寄せ、そのためにこれらの波は海岸近くで高い崖にぶつかる。その場では船は騒々しい音を立て、船乗りたちは叫び声を上げる。高い波が崖に押し寄せる時、険しい岸壁は水の争いを、波の突進を、静かに待っている。その恐ろしい時に海は客をいっぱい乗せた船を運び去る。そのために船は力を奪われ、命を失い、泡だらけで波の背に乗らねばならなくなる。そうなれば、その船にはそこで恐ろしい混乱が予想されるであろう。強い私が険しい道の上を急ぐ時、人々に恐怖が訪れるであろう。だれがその恐怖を鎮めるというのか。(17-35)

私は時おり背の上にある黒い雲を急いで通り抜け、大きい水の器をあちこちに飛び散らし、時々それらの器を再び一緒に滑らせる。雲と雲が互いに激しくぶつかる時、剣と剣がぶつかる時のようにその音は最も大きく町中に響き渡り、最もうるさい衝突の音を立てる。人々の上を急いで進む黒い生き物は火と青白い炎を吐き、不吉で大きな物音は苦しみにあえぐ人々の上を通り過ぎる。それらは争いながら進み、黒い湿り気と水を、胸から、腹から、ばらばらと降らせる。恐ろしい一隊は争いながら進む。黒いさまよう亡霊が鋭い武器を射る時、恐怖が起こり、人々の間には激しい苦悩が、町々には脅威が訪れる。愚かな者は死の槍を恐れることはないであろうが、真の創造主が雨の中で、矢と飛び行く槍を上から、騒がしい場所から、愚かな者に向かって真っ直ぐに放たせるなら、その者は死んでしまうであろう。素早く走る物の武器に打たれ、その武器から無事に逃れる者はほとんどいない。(36-58)

雲がぶつかり合う中、大騒動の中、川の懐の上を私は激しい勢いで突進する。その時、私はこの争いの発端となる。高いところでひしめく軍勢は大きな音を立ててぶつかる。その時、私は空の覆いの下の大地に近いところで再び降り、私の主人に強く諭され、抱えるべきものを背に乗せる。このように、力強い召使である私は、たまに戦い、ある時は地面の下に、ある時は高いところから波の下に潜らねばならない。また、私はある時は上空から海を、激しい潮流を乱し、時には高々と上昇し、流れる雲をかき回し、素早く、激しく、遠くまで動く。私は何と呼ばれているか、あるいは、私が休めない時に私を奮起させるも

のは何か、私が動かない時に私を落ち着かせるものは何か言いなさい。(59-74)[4]

4

輪をはめられた私はいつも忙しいが、主人には喜んで従い、眠りを中断し、主人が私に首飾りをくれたことを叫んで告げねばならない。男か女のどちらかが、疲れて眠そうな私をしばしば訪ねてきた。冬の寒さの中で私は敵意に満ちた者たちに向かって、「暖かい手足は縛られた輪を時々壊す」と答える。しかし、もしその輪が何であるのかが分かり、私の謎を言葉でうまく答えられれば、それは私の愚かな召使にとっても、私にとっても楽しいことである。(1-12)[5]

5

私は孤独な者であり、鉄の武器で傷つき、刀で怪我をし、戦という行為に飽き、刃に疲れている。私は戦を、恐ろしい争いをしばしば目撃する。自分が人々と共に完全に滅びるまで、戦からの救出が訪れるという楽しみは私には期待できない。それまでは、硬い刃の、恐ろしく鋭い鉄槌の遺物、鍛治師の手細工が私を打ち、砦の中で私を刺す。私はいっそう不愉快な争いを待たねばならない。私は薬草で傷をいやす医師たちを戦場で見つけることはできず、私の刀傷は致命的な打撃によって昼も夜も大きくなる。[6] (1-14)[7]

6

真の勝利の支配者であられるキリストは私を戦のために造られた。主が私に戦えと命令なさると、私はしばしば全く触れることなく生き物を焼き、地上の近くにいる多数の人々を迫害し、苦しめる。私は時には多くの者の心を喜ばせ、またある時には、いずれ戦うことになる者たちをずいぶん遠くから励ますこと

---

[4] 答えは、第1段落 (1-16) は「地上の地震」(Earthquake on land)、第2段落 (17-35) は「海の嵐」(Storm on sea)、第3、第4段落 (36-74) は「雷雨」(Thunderstorm) と全体のまとめ。

[5] 答えは「石臼」(Millstone) または「鐘」(Bell)。

[6] この詩の末尾に記された S に相当するルーン文字は楯 (Shield) を表すことから、この文字はこの謎詩の答えを示すものと考えられている (Krapp & Dobbie, 1936: 325)。

[7] 答えは「楯」(Shield)。

もある。しかし、恐ろしい騒動の後で私が再び彼らの生活を改めてやると、彼らは私の攻撃と同様に私の励ましも感じとる。(1-10)[8]

7

私が地面を歩き、家に住み、あるいは水を掻く時、私の衣服は音を立てない。私の飾り物と高い空は時おり私を人々の住まいの上へと引き上げる。すると、私は雲の力によって人々の上を越えて遠くへと運ばれる。旅する生き物である私が海と陸の近くにいない時、私の飾り物は大きな音を立て、美しい曲を奏で、楽しく歌う。(1-9)[9]

8

私は口を使って多くの声でしゃべり、さまざまな調べで歌い、しばしば声を変え、甲高い声で鳴き、自分の旋律を守り、歌をやめない。老いた夕べの歌手である私は町の人々に喜びをもたらす。私が声の調子を変えて歌を唄うと、人々は家の中で静かに腰をかがめて座る。女道化師のように声高らかに道化の歌をまね、自分の声で楽しいことをたくさん人々に告げるこの私は何と呼ばれているか言いなさい。(1-11)[10]

9

最近、父と母は私を死んだと思い、私を捨てた。その時、私にはまだ命も生きる気力もなかった。すると、とても優しい女性が私を衣類で包み、抱いて保護し、まるで自分の子供のように大切に保護着でくるんでくれた。やがて、私は運命に従い、彼女の庇護をうけて、血のつながりのない者たちの間で力強く育った。この女性の保護者はその後も私を養育してくれた。やがて私は成長し、より遠くへと進めるようになった。こうしたことによって、彼女自身の息子と

[8] 答えは「太陽」(Sun)。

[9] 答えは「白鳥」(Swan)。

[10] 答えは「ナイチンゲール」(Nightingale)。

娘の数はそれだけ減ってしまった。(1-12)[11]

10

私のくちばしは狭いところにあった。私は潮の流れによって下から押され、大洋の流れによって深いところに沈められた。それから、私は体の上の部分を波に包まれながらも、漂う一本の木に体を休ませ、海で成長した。黒い服を着て海と木に保護された状態から抜け出した時、私の命は滅びていなかった。空気と風が活気に満ちた私を波間から高々と持ち上げ、あざらしの水浴場[12]の上を遠くへと運んだ時、私を飾っていたものの一部は白かった。私が何と呼ばれているか言いなさい。(1-11)[13]

11

私の衣装は灰色で、上着には明るい赤と透明の飾りがある。私は愚かな者たちを惑わせ、馬鹿者たちを愚かな行いへと誘い、その他の者たちに対しても実りの多い生き方の邪魔をする。これほど狂い、心を奪われ、道を踏みはずしているのに、彼らがすべての人々に向かって私のひねくれた性格を称えるなんて、私には全く理解できない。高貴なお方が最も大切な宝を運ばれる前に、彼らが愚かな行為をやめなければ、彼らはその習慣ゆえに呪われることであろう。(1-10)[14]

12

私は命のある間は足で歩き、地面を、緑の平原を切り開く。命がなくなると、私は黒い奴隷を — 時には優れた人々も — 強く縛る。私は勇敢な兵士に胸から飲み物を与えることもある。時には、とても誇らしげな花嫁が私を足で踏み

---

[11] 答えは「カッコー」(Cuckoo)。

[12] 「海」の代称表現 (Kenning) の1つ。

[13] 答えは「かおじろがん」(Barnacle goose)。

[14] 答えは少なくとも「夜」(Night)、「ワイン」(Wine)、「黄金」(Gold)の3通りが可能である (Krapp & Dobbie, 1936: 327-8)。

つける。またある時は、遠くから連れてこられた黒い髪の女奴隷が、酔っ払った愚かな女の召使が、暗い夜に私を押したり引いたりする。彼女は私を水に浸けたり、火のそばで気持ちよく暖めることもある。彼女は気まぐれな手を私の胸に当て、せっせと動かし、私の黒い体をさする。生きている間は地面を荒らし、死後は人間に役立つこの私は何と呼ばれているか言いなさい。(1-15)[15]

13

私は 6 匹の兄弟と姉妹が一緒に —全部で 10 匹いた— 芝土の上を歩くのを見た。彼らは元気そのものであった。彼らの皮はいずれも家の壁にはっきりと目立つように掛けられていた。彼らは衣類を奪われ、天の守護者の力によって目覚めさせられ、灰色の花を口で食い散らかさねばならなかったが、だれもそれで困るということはなく、腹がよりいっそう痛むということもなかった。彼らは生まれ出た時、飾り物を脱ぎ捨てたが、その後、衣服も改められ、彼らは大地を踏みしめて出かけて行った。(1-11)[16]

14

私はかつて武装した兵士であった。現在は、誇らしげな若者が金、銀、鉤状に曲げられた針金で私を包んでいる。人々は時々私に口づけをする。時々、私は親しい仲間を歌によって戦へと召集するが、馬が私を領地を越えて運ぶこともある。時には海の馬[17]が装飾品で輝く私を潮の流れを越えて運んだり、指輪で飾られた一人の乙女が私の胸をいっぱいにすることもある。硬くて頭がない私は時々裸のまま食卓の上に横たわらねばならない。私は美しい宝石で飾られ、人々が酒を飲む広間の壁につるされることもある。馬に乗った兵士たちが立派な武具を運ぶ時、華々しく飾られた私はある人の胸から息を吸い込まねばならないこともある。私は時おり声を出して誇り高い兵士たちを酒の席へと招く。声を張り上げて敵から盗難品を奪い、盗賊たちを追い払わねばならないことも

[15] 答えは「皮革」(Leather)、とりわけ「牛皮（革)」(Oxhide)。

[16] 答えは「10 羽のひな鳥」(Ten chickens)。

[17] 「船」の代称表現の 1 つ。

ある。私は何と呼ばれているか尋ねて聞きなさい。(1-19)[18]

15

私の首は白く、頭は茶色、脇腹も同じく茶色である。私は歩くのが速く、戦闘用の武器を携えている。背にも頬にも毛が生えている。二つの耳は目の上に真っ直ぐに立っている。私は緑の草の上をつま先で歩く。私が子供たちと一緒に家に住み、幼い家族と共に留まっている時、血に飢えた兵士が隠れている私を見つけたら、私には悲しい出来事が確実に訪れる —見知らぬ者が私の家の玄関にやってきた時、家族には確実に死が訪れる。それゆえ、もしその者が私をしつこく追うなら、私は臆病な子供たちを住まいから連れ出して逃がし、彼らを救わねばならない。その者は這いながらやって来る。私は穴の中で獰猛な者を待ち受けることなく、—それは得策ではないので— 高い丘に急いで前足で小道を作らねばならない。可愛い血のつながりのある家族を丘の穴を通って秘密の小道へと連れて行ければ、私は大切な者たちの命をたやすく守れ、殺戮の犬との戦いを恐れる必要は全くなくなる。しかし、悪意に満ちた敵が狭い道を通って私の足跡を追ってくるなら、私は丘の頂きに着いた時、やっとの思いで逃れた憎い敵めがけて力まかせに槍を投げつけることになるであろう。そして、敵はその道の上で私と戦をせざるを得なくなるであろう。(1-29)[19]

16

私は、波に包まれて海底を訪れる時、しばしば波と争い、風と戦い、また、同時に双方に対抗せねばならない。私は自分の故国を知らない。動かずにいる時、私は戦には強い。それができない時は、波と風は私より強く、私を引き裂き、私をすぐに敗走させ、私が守らねばならないものを運び去ろうとする。しかし、私の尾が耐えることができ、岩が強い私にしっかり掴まることができるなら、私はそれらに抵抗できるであろう。私が何と呼ばれているか尋ねて聞き

[18] 答えは「角笛」(Horn)。

[19] 答えは「あなぐま」(Badger) が有力であるが、「やまあらし」(Porcupine)、「きつね」(Fox)、「はりねずみ」(Hedgehog) の可能性もある。

なさい。(1-10)[20]

17

私は群れの保護者であり、針金の柵で守られ、内部は高価な宝で満ちている。私は昼間はしばしば恐ろしい槍を吐き出す。私は満たされれば、それだけ私の功績は増える。時々、私は黒くて茶色い武器、鋭い槍、毒の塗られた恐ろしい槍を飲み込むことがある。私の胃は便利であり、腹の中はきれいで、誇り高い者たちにとって貴重なものである。私は自分の口から出るものを忘れることはない。(1-11)[21]

18

私は不思議な生き物であり、一口と大きな腹があるのに、言葉を発したり、人前で話をすることはできない(...)[22]。私と多くの親族は船に乗っていた。(1-4)[23]

19

誇り高く、頭をきれいに飾られた馬が草原を速く駆け、旅をするのを私は見た。その背には戦う力が満ちていた。戦士は鋲飾りのついたものに乗っていた。速く流れる長い道が強く勇敢な鷹を運んだ。この旅は、すなわち、これらの者たちの遠征は輝かしいものであった。私が何と呼ばれているか言いなさい。(1-9)[24]

---

[20] 答えは「錨」(Anchor)。

[21] 答えは「投石器」(Ballista) が有力だが、その他に「砦」(Fortress) も可能。

[22] 写本には欠落はないが、内容が不完全なことから、詩の大半を含む部分が失われているものと思われる (Krapp & Dobbie, 1936: 331)。

[23] 答えは「革袋」(Leather bottle)。

[24] 「馬上の鷹匠」を描写しているが、答えは不明。

20

私は不思議な生き物で、戦いのために作られ、主人に愛され、美しく飾られている。私の胴鎧はまだら色で、主人が私に与えてくれた、災いをもたらす宝石の回りには輝く針金が巻きつけられている。主人はさまよっている私を時々戦いに連れて行く。明るい日は、私は宝物、鍛冶師の細工物、黄金を家に運ぶ。私はしばしば戦闘用の武器で命ある者を殺す。王は私を宝物と銀で飾り、広間で私を称える。王は賛辞を惜しまず、蜂蜜酒を飲む大勢の前で私の状態を語る。王は私を閉じ込めておき、旅に疲れた、戦に勇敢な私を再び解き放つことが時々ある。私はしばしば味方の手で人をひどく傷つけた。私はあちこちで憎まれ、武器の間でも非難されている。それゆえ、敵のだれかが戦で私を襲撃したとしても、私の息子が命をかけて殺害者にあだ討ちをしてくれる期待は持てそうにない。指輪をくれた私の所有者から離れ、主人を亡くして放浪しないかぎり、私が生まれた家族は私の子孫によって増えることはないであろう。そのために、私がこれまでどおり心から主人に仕え、主人に従い、戦をするのなら、私は出産できない定めとなるであろう。私は新婦との交わりを許されず、かつて私に手枷と足枷をはめた者は、その楽しい遊びを私から取り上げるであろう。それゆえ、私は独身のまま英雄の宝を楽しまねばならない。飾りを身につけた愚かな私はしばしば女を怒らせ、その欲望を拒む。女は私に暴言を吐き、両手を打ち、言葉で私をののしり、悪態をつく。私はそれにかまわず、戦を(...)[25]。(1-35)[26]

21

私の鼻は下を向いている。私は身を屈めて進み、地面を掘り、灰色の森の敵に導かれて進む。一方、私の主人、すなわち、柄の守り手は屈んで歩き、草原を押し進み、私を運んでは押し、私の通った跡に種子を蒔く。私は森から連れてこられ、巧みに縛られ、車で運ばれ、鼻でかぎながら進む。私には驚くべき多くのことがある —歩くと、片方の跡は緑であるが、もう片方の跡は明らかに黒くなる。精巧に作られた先端の部分が私の背中を貫いて下がっていて、もう一方の先は私の頭上にあり、硬く、そして前を向いている。私の主人となる

[25] 写本1葉欠落等、この詩の終わり方に関して諸説がある (Krapp & Dobbie, 1936: 332-3)。

[26] 答えは「刀」(Sword)。

者が後から上手に世話をしてくれれば、私の歯で引き裂かれたものは片側に落ちる。(1-15)[27]

22

60 名の人々が馬に乗って一緒に海岸までやってきた。馬上の人々は 11 頭の立派な馬を持っていて、そのうちの 4 頭は白馬であった。兵士たちは思いどおりに海を越えることができなかった。海はあまりにも深く、波の砕ける音は恐ろしく、海岸は高く、潮の流れは激しかったのである。そこで、人々は車の中に乗り込み、その柱の下に馬を積み込んだ。すると、この車は馬を、軍馬を、槍が自慢の兵士たちを入り江を越えて陸まで運んだ —牡牛も奴隷の力も太った馬もその車を引くことはおろか、それを潮の流れの上に浮かべることも、客を乗せて海底を進むことも、海を乱すことも、空中を飛び、そして戻ることもできなかったであろう。車は高い海岸から海を越えて人々と白馬を一緒に運んだので、人々とその馬は力強く無事に海から陸に上がり、対岸にたどり着けた。(1-21)[28]

23

私の名前を逆に綴ると Agob となる。私は戦のために作られた不思議な生き物で、身を屈めると、胸から有毒な刺が飛び出す。その恐ろしい魔物を私から遠くへ追い払う準備は整っている。その苦痛を私に与えた主人が私の手足を自由にしてくれると、私は破滅におののきながらも、以前飲み込んだ猛毒をすぐに吐き出す。私の腹から飛び出すものは、だれかに命中すると、それがだれであれ、簡単には抜けない。そのため、その人は至急自分の力で、自分の命をかけて、その悪魔の飲み物の代価を払うことになる。私は、解放されている時は、巧みに縛られていないかぎり、だれにも従うつもりはない。私が何と呼ばれているか言いなさい。(1-16)[29]

---

[27] 答えは「鋤（すき）」(Plow)。

[28] 答えは「月」(Month) が有力であるが、「橋」(Bridge) や「12 月」(December) も提案されている。

[29] 答えは「弓」(Bow)。

24

私は変った生き物で、自分の声を変える —時には犬のように吠え、時には山羊のように鳴き、時には鵞鳥のように騒ぎ、時には鷹のように叫び、時には戦好きの鳥である灰色の鷲の声をまね、時には口から鳶の声を出し、時には楽しそうに座っている場所で海かもめの歌を唄う。私はGと綴られ、AとR、OもHもIも同じように助けてくれる。私には、これら6つの文字によってはっきりと示される名前が付けられている。[30] (1-10)[31]

25

私は不思議な生き物で、婦人たちに喜ばれ、近所の人々の役に立つ。私は殺し屋一人を除いて、町の住人にはだれ一人危害を加えることはない。私の土台はとても高く、私はベッドの上に立ち、下の一部分は毛深くなっている。時々、かなり美しい百姓の娘で勇敢な乙女が大胆にも私を掴み、赤い髪に襲いかかり、頭を奪い取り、狭いところに押し込める。もっとも、私を閉じ込める縮れ毛の女はすぐ私に会いたくなる。その目は濡れている。(1-11)[32]

26

敵の一人が私から命を奪い、肉体の力を取り去った後、私を濡らし、水に浸け、再び取り出し、日の当たるところに置いた。私はその場所で自分の毛をすっかり失ってしまった。その後、研がれて錆を取り除かれた小刀の硬い先が私を切った。指が私を折り曲げ、鳥の喜び[33]が便利な水滴[34]を私にふりかけ、しばしば茶色の縁[35]を越えて旅し、木の染料、流れの一部を飲み込み、再び私の

---

[30] 6つのルーン文字を並べ変えるとhigoraとなるが、これはmagpie「かささぎ」またはjay「かけす」を表すとする説が有力である(Wyatt, 1912: 82)。

[31] 答えは「かささぎ」または「かけす」。

[32] 答えは「たまねぎ」(Onion)が最も有力であるが、「にらねぎ」(Leek)、「麻」(Hemp)なども可能。

[33] 「(がちょうの)羽ペン」のこと。

[34] 「インク」のこと。

[35] 角(つの)製のインクつぼの縁。

上を歩き、黒い跡を残しながら旅した。その後、男が私を表紙で包み、私の上に皮を張り、黄金で飾った。そして、直ちに、飾り金具で巻かれた鍛治師たちの素晴らしい細工物が私を飾った。さあ、これらの飾り物と赤い染料、および見事な財宝で人々の守護者をあちこちで祝福しよう —愚かな者に決して非難させてはならない。人々の子たちが私を用いるなら、その子たちはそれだけ危険から遠のき、勝利により近くなり、心はより強く、より楽しく、また頭はよりよくなるであろう。彼らはより多くの友人を、すなわち、大切で親密、誠実で善良、世話好きで忠実な友を持つであろう。これらの友は喜んで名誉と富を増やし、彼らを好意と親切で包み、愛の抱擁で彼らを強く抱き締めるであろう。人々の役に立つ私が何と呼ばれているか聞き出しなさい。私の名はよく知られていて、人々に貢献し、私自身は神聖なものである。(1-28)[36]

27

私は人々にとって貴重なものであり、あちこちで見出され、森や町の高台から、谷から、丘から運ばれる。昼間、翼が私を空気に乗せて運び、屋根の覆いの下へと巧みに連れ込んだ。その後、人々は私を樽の中で洗った。今、私は縛る者、打つ者であるが、すぐに投げる者となる。私は若者を、時には老いた農夫を、地面に投げつける。私に掴みかかり、私の力に対抗する者は、愚かな行いを前もって思いとどまらなければ、自分の背中を地面に押しつけねばならなくなることをすぐ思い知らされるであろう。その者は力を奪われ、話が大胆になり、活気がなくなり、心も足も手も自由がきかなくなる。このように、私は地上の日の光の下で打撃を与えた後、愚かな者を縛るが、この私は何と呼ばれているか尋ねて聞きなさい。(1-17)[37]

28

陸地の一部は人間の宝物の中で最も固く、最も鋭く、最も厳しいものによって美しく飾られている。それは刻まれ、磨かれ、曲げられ、乾かされ、巻かれ、ひねられ、漂白され、柔らかくされ、装飾され、整えられ、遠くから人々の戸

[36] 答えは「本」(Book)、とりわけ「聖書」(Holy Bible) が有力。

[37] 答えは「蜂蜜酒」(Mead) の外に、「鞭」(Whip) がある。

口まで運ばれる。生きている者たちの喜びはその中にあり、存続し、消え去ることはない。それらは生きている間は長く自分たちの楽しみを受け、不平は少しも言わず、そして死んだ後は語り始め、さまざまなことを告げ始める。この生き物は何かを考えるのは賢い者にとって素晴らしいことである。(1-13)[38]

29

私は驚くべき生き物が遠征から戦利品を、巧みに飾られた、輝く空中の器[39]を、家に運ぶのを見た。それは、できることなら、自分で砦の中に住まいを築き、上手に仕上げることを望んだ。その時、地上のすべての住人によく知られた、驚くべき生き物が壁の上を越えて現れ、戦利品を奪い返し、放浪者をしぶしぶ家へ追い返した。すると、それは敵意を抱きながらそこから西へと向かい、急いでその場から立ち去った。ちりは空に昇り、露は地上に降り、夜は去った。その後、その生き物がどこへ旅したのかだれも知らなかった。(1-14)[40]

30(A)[41]

私は栄光に包まれてはいるが、炎に悩まされ、風と戯れ、嵐によって一ヶ所に追いやられ、旅を渇望し、火に苦しめられる。私は花咲く森、くすぶる燃えさしである。私の仲間はしばしば私を手から手へと渡し、そして誇り高い男と女が私に口付けをする。私が立ち上がり、多くの者が私に向かって腰を屈める時には、私はその場で人々のために幸福の増大を図らねばならない。(1-9)[42]

---

[38] 答えは「モルト入りの酒」(John Barleycorn) が有力。「ビール」、「エール」という、より具体的な説もある。一方、「ハープ」(Harp) の可能性もある。

[39] 「月」のこと。

[40] 答えは「月と太陽」(Moon and Sun) が最も有力であるが、「雲と月」、「鳥と風」という説もある。

[41] 「エクセタ写本」には謎詩30のテキストが2つあり、A, B または a, b で区別されている。ちなみに、後者（B または b）は60の直前にくる。

[42] 答えには諸説があり、定まっていない。

31

この世はさまざまな方法で美しくされ、きれいに飾られている。私は奇妙な物が広間で唄うのを見た。あのような生き物は人々の中にはいなかった。それは驚くべき形をしていた。鼻は下を向き、足と手は鳥に似ていた。しかし、それは飛ぶことも遠くへ行くこともできない。それでも、それはしきりに動きたがり、自分に巧みに定められたことをやり始め、しばしば人々の中でひっきりなしに歩き回る。それは宴席に座り、自分の技をこの世の人々に知らせることのできる機会を待つ。それは、人々が自分たちの楽しみとしているものをその場で楽しむことはない。勇敢で栄光を望むそのものは、黙ってはいるが、その足には美しい声が、快い歌の技がある。その生き物が足を使ってどのようにして下から曲を奏でるのか私には分からない。装身具で飾られていて、宝環を自慢する力の強いこの姉が裸で宝物を守る時、その首には兄弟たちがいる。賢い歌い手にとって、この生き物は何であるかを考えるのは大切なことである。(1-24)[43]

32

この世はいろんな方法できれいにされ、飾り物で美しくされている。私は旅に優れた装置が動き、砂利に体をこすりつけ、きしみながら進むのを見た。この驚くべき物には目も手もなく、肩も腕もなかった。この奇妙な物体は片足で滑り、よく動き、草原を越えて行かねばならない。それにはたくさんの肋骨があり、口は真中にあった。それは人類に役立ち、食料を手に入れ、人々のために働き、食べ物を運び入れ、そして毎年人々に貢物を納める。人々は、富める者も貧しい者も、その貢物を楽しむ。言葉に秀でた賢い者よ、この生き物は何であるか、知っているなら言いなさい。(1-14)[44]

33

不思議な生き物が潮の流れに沿って帆走してきた。この素晴らしい物は陸に

[43] 答えは「バグパイプ」(Bagpipe) が最有力であるが、「フィドル」(Fiddle) 説もある。

[44] 答えは「船」(Ship) または「車輪」(Wheel) が最も近い。

向かって喉から叫び、大きな音を響かせた —その笑い声は恐ろしく、地上に恐怖をもたらした。その両端は鋭かった。それは荒々しかったが、戦には消極的であった。もっとも、それはいざ戦うとなると破壊的で、激しく荒れ狂いながら船腹をえぐった。それは恐ろしい呪いをかけ、自分の性質について巧みに語った。「私の母は最も高貴な婦人の一族の出であり、強く成長した時に母は私の娘となる[45]。このように、彼女はすべての国で地面の上に優雅に立たねばならないが、これは各地の人々に広く知れ渡っていることである。」(1-13)[46]

34

私は人々の住む町中で家畜を養う生き物を見た。それはたくさんの歯を持っていて、鼻を使って下に向かって進み、せっせと略奪し、それから家に戻り、壁の周囲をうろつき、草を求める。それは固定していないものをたえず探し回り、深く根を張っている美しいものについては静かにその場に立たせておき、明るく輝かせ、花を咲かせ、成長させる。(1-9)[47]

35

とても冷たい湿った土地は中から私を初めて産み出した。私が思うに、自分は一頭分の羊毛と髪から高い技術によって作り出されたものではない。横糸は私に巻かれることはなく、また、私には縦糸もなく、棹のぶつかる音によって糸が響くこともなく、ぐるぐる回る杼[48]が私の上を滑ることもなく、また織り手の棹がどこからか私を打つこともない。黄色い美しい布を見事に飾る虫[49]が運命の女神たちの力によって私を織ったのではない。それにもかかわらず、地上の至る所で、人々の前で、私は快適な衣と呼ばれている。優れた思考を持ち、言葉に秀でた人よ、この衣服は何であるか偽りのない言葉で言いなさい。(1-14)[50]

---

[45] 氷山の母は水であるが、氷山は再び水になりうることから、その娘は水でもあることになる(Gordon, 1954: 300)。

[46] 答えは「氷山」(Iceberg) または「氷」(Ice)。

[47] 答えは「熊手、レーキ」(Rake)。

[48] 「ひ」(機織りの横糸を巻いた管を入れる舟形の箱、Shuttle)。

[49] 「蚕」のこと。

[50] この謎詩はノーサンブリア方言で書かれた、ライデン大学図書館収蔵の写本 (Cod. Voss. 106,

36

私はある生き物が道を行くのを見た。それは優雅に、しかも見事に飾られていた。腹の下には 4 本の足があり、背中には 8 本の足があった —それらは男と女と馬の足であった[51]。それには 2 つの翼と 12 の目と 6 つの頭があった。それは何だったか言いなさい。(1-7)

それは海を渡った。それは鳥だけではなく、馬と人、犬と鳥、それから女の姿のいずれにも似ていた。あなたに言葉が分かれば、この生き物はどういう性質か私たちには分かっていることに気づくであろう。(8-13)[52]

37

私はある生き物を見た —腹は後にあって大きくふくれ上がっていた。召使がその世話をしていたが、その男はとても力が強く、その生き物がいっぱいになって目から飛び出すまでじっとがまんした。腹の中のものを別のものに譲らざるを得なくなった時でも、その生き物は死ぬことはなく、胸の中で再生が行われ、息はよみがえる。それは息子を産み、みずからその父親となる。(1-8)[53]

38

私は幼い時の楽しみをむさぼる雄の生き物を見た。命を支える者がこの生き物のために贈り物として 4 つの泉を勢いよく噴出させた。一人の男が語った —彼は私に向かって言った。「あの生き物は、生き続けるなら、丘を破壊し、引き裂かれるなら、生きている者たちを縛ることであろう。」(1-7)[54]

---

fol. 25b) にも収録されている。答えは「甲冑」(Coat of mail)。

[51] 4-5行目に書かれている子音に母音を補うと、ラテン語の homo「男」、mulier「女」、equus「馬」となる (Krapp & Dobbie, 1936: 341; Muir, 1994: 601)。

[52] 答えは、第1段落は「男、女、馬」、第2段落は「船」であるが、この謎詩全体としては不明。

[53] 答えは「ふいご」(Bellows) が有力。

[54] 答えは「若い雄牛」(Young bull または Bullock)。

参考文献

Gordon, R.K.（訳） 1954. *Anglo-Saxon Poetry.*（Everyman's Library 794） London: Dent & Dutton.

Hazome, Takeichi.（羽染竹一）（編訳） 1985.『古英詩大観』東京, 原書房.

Kennedy, Charles W. 1943. *The Earliest English Poetry.* London: Methuen.

Krapp, George Philip, and Elliot Van Kirk Dobbie.（編） 1936. *The Exeter Book.*（Anglo-Saxon Poetic Records Vol. III.） New York: Columbia University Press.

Mackie, W.S.（編） 1934. *The Exeter Book.* Part II.（EETS. OS. 194） London & New York: Oxford University Press.

Muir, Bernard J.（編） 1994. *The Exeter Anthology of Old English Poetry.* 2vols. Exeter: University of Exeter Press.

Tupper, Fredericks, Jr.（編） 1910. *The Riddles of the Exeter Book.* Boston: Ginn & Co.

Wyatt, Alfred John.（編） 1912. *Old English Riddles.*（Belles-lettres series I. 5.） Boston & London: Heath.